

企画・制作/岐阜新聞社営業局



SDGs interview

真夏の猛暑やゲリラ豪雨、土砂災害。

近年叫ばれるこれらの問題は気候変動によるものとされ、

温室効果ガスの増加や森林破壊が原因と考えられています。

SDGs(持続可能な開発目標)では、海や川、森林といった

自然を守り、生態系破壊や気候変動を止めることも、

大切な目標の1つとされています。

今回は、県内で幅広い環境学習に携わる

環境カウンセラーの小林由紀子氏にお話を伺いました。



【お話を聞いた人】

小林由紀子氏

特定非営利法人 e-plus 生産学習研究所代表。小学校のPTA活動で牛乳パック回収を担当したことをきっかけに、環境問題に関心を持つ。環境省に登録する環境カウンセラーとなり、2005年に同志を築いて特定非営利法人 e-plus 生産学習研究所を設立。07年には地球温暖化防止活動環境大臣表彰(環境教育・普及啓発部門)を受けた。県内を中心に、小中学生に向けた環境学習の企画運営、環境問題の調査などに携わっている。

— 今年は何年より早く猛暑がやって来ました。

そうですね。加速的に暑くなってきています。地球温暖化の影響を大に受けているとみられ、それによる「気候変動」についても真剣に考えなければいけません。ゲリラ豪雨などで皆さん体感していますよね。

気候変動の原因となるエネルギーを大量に使うのは、経済活動や私たちの暮らし。そこから出る廃棄物は、海や陸を汚しています。自分の生活が地球とつながっていることを理解すれば、環境負荷の少ない商品を選ぶ「グリーンコンシューマー」や「エシカル消費」を自然と意識できるのではないかと思います。

— エシカルな商品、最近よく見かけるようになりましたね。しかしどれも値段が高く、なかなか手が出ません…。

まずは使う分だけ、少しずつ始めれば良いのではないのでしょうか。取り組み側も、持続可能でなければ意味がないですからね。あとは背景を知ること。例えば「バーム油」は化粧品や洗剤、チョコレートなど、さまざまなものに使われています。原料表示には「植物油脂」としか書かれないため、日ごろ意識することは少ないのですが、原料となるアブラヤシは、東南アジアの熱帯雨林を切り開いたプランテーションで栽培されています。破壊された森林ではゾウやトラ、オラウータンたちが住みかを失い、個体数が激減。またその土地は「泥炭地」という炭素を含んだ土壌で、開発する際に温室効果ガスを排出します。開発された泥炭地は非常に燃えやすくなり、森林火災が起きて、また大量の温室効果ガスが排出される…。こうした背景を知ると、「バーム油を使いたくないな」となりますよね。

— 知らないうちに、環境破壊につながってしまっているんですね…。「知る」って大事ですね。

その通りです。気づかないうちに、私たちの身の回りもどんどん変化しています。例えば夏のセミ。都市部で聞こえるのは、30年前までは珍しかったクマゼミの声ばかり。もとは亜熱帯のチョウであるツマグロヒョウモンは、今では12月まで飛んでいます。生態系を崩すなどの影響が少ないとしても、これが正常と思っではいけないと思います。変化に気づき、危機感を持つことが必要だと思います。

環境問題は、私たちに「経済的・物質的豊かさは、本当の豊かさなの?」と投げかけている気がするんです。物質的豊かさを信じてきた大人たちの多くは、SDGsを「すばらしいこと」と捉えているでしょう。しかし新しい価値観で育ちつつある次の世代は「当たり前だよ」という認識を持っているようです。

— 若者や子どもたちの方が、SDGsを理解しているようにも感じます。学校給食では、ストローのない牛乳パックの取り組みが進んでいます。

プラスチックごみの削減につながるだけでなく、子どもたちへの意識付けに、すごく良いと思います。紙パックはきれいに洗って乾かせばリサイクルすることが可能です。

学校の先生たちには、ストローがなくなった理由や、洗って乾かすことの意味、リサイクルやゴミ削減の大切さを子どもたちに伝える役目をしっかり果たしてほしいと思います。

— 岐阜市でも4月からプラごみの分別収集が始まりましたね。

プラスチックにもいろいろな種類があります。正しく分別もせず全部一緒に入れたり、汚れたままだったり、十分に乾かさずカビが生えてしまったら、結局燃やすしかありません。リサイクルにもエネルギーがいります。洗って乾かす。その基本をまず徹底してほしいですね。

給食で紙パックを洗い、その意味を理解した子どもたちは、プラごみでも自然とできるようになるでしょう。大人も意識しなければいけません。

— 「大変そう」「誰かがやってくれる」「まだ大丈夫」。そんな大人が、まだまだ多いように感じます。

全部我慢しなくてもいいんです。「お気に入りの化粧品にバーム油が使われているけど、変えたくない」「服だけは質が良い」でもOK。「じゃあ他のところでちょっと我慢しよう」という気持ちを持って、バランス良く、長く続けていくことを考えてみてください。企業は計画的に、必要な分だけ作る。今よりも環境負荷がかからない方法を考えること。まずはできるところから、意識する姿勢が大切だと思います。

— 無理せず、少しずつ変えていけばいいんですね。小林先生、ありがとうございました。

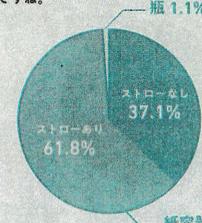


SCHOOL POP 日本製紙開発の給食牛乳容器 年間100トンのプラごみ削減へ

200ml

岐阜県でも進む！
学校給食でストローレス牛乳パック

日本製紙が開発したストローがない学校給食用牛乳パックの採用が今年4月以降に全国で広がり、年間100トンのプラスチックが削減できる見通しが明らかになりました。岐阜県でも、同社の牛乳パックを導入する動きが始まり、今年度は県内37.1%の小中学校が採用。それにより1265万204本分のストローがプラスチック削減につながります。プラスチック削減量をストロー1本あたり0.5グラムで試算すると、年間約5トン。飲み口を開けやすい工夫した学校給食用牛乳パックで、脱プラスチックに貢献する動きは、日常生活でプラごみを出さない工夫の一つ、今後も導入が広がることに期待したいですね。



紙容器	98.9%
ストローあり	61.8%
ストローなし	37.1%
瓶	1.1%

【岐阜県の学校給食用牛乳のストローレスの割合】

県では約5トン 1265万204本のストローが脱プラに貢献!